

第30回日本アルコール関連問題学会を終えて

津久江 一郎

「学会を開くことには反対します」という発言には正直びっくりした。

ずっと以前、小生が院生3年目の医局会でのことを思い出す。

「日本アルコール医学会」が設立されたのは、今から43年も前のことである。恩師小沼十寸穂教授は、この学会を設立した4名の発起人のお一人と聞いている。それ以前、昭和40年4月に第62日本精神神経学会を当地で受けたことがあったが、学会を開くともなると、当時は学会屋と称する便利なものもおらず、ちゃんとしたホテルもほとんどなく、宿舎の手配は主として児玉久、宮地秀幸先生によったが、これは裏方の最たるもので大変な苦労であったと思う。その他、市内観光案内（夜の部を含む）、グルメ案内、宮島ガイドブック等の作成で、浅田成也助教授を始めとするオーブンの先生方は日中は勿論のこと、夜ごと大変な苦労、努力であったと思う。（正確には「広島食べある記、飲みある記 高畑長吉編」）

われわれウンテンは、せいぜい学会中のスライド係で右往左往したぐらいで、あとは学会中の会場を早朝と会の終わった後にホウキで掃いたり、ゴミ拾いをしたり、会場の整備を黙々としたのを懐かしく思い出す。なお、スライドで思い出すのは特別に紙製6連結のスライドホルダーをわざわざ作成し、大変有用であった。

参考：会場係というウンテンとは、児玉秀敏先生、ノームウ、（今の野村陽平先生のご

尊父）、ジッチャン（今の日域広昭先生のご尊父）等だったように憶えている。石津宏、中村英雄先生については、記憶が定かではないのは小生がボケたのか、もしくは彼らがさぼっておられたのかもしれない。（後の調べでわかったが、小生は日域昭三、中村英雄先生等と第2会場係であり、野村昭太郎、石津宏先生等は第1会場の方の係であった。）

—さて、医局会の続きの話に戻る—

小生もちょうどこの時の医局会の末席を汚していたが、小沼教授より「自分の退官時を記念して日本アルコール医学会総会を引き受けたい」というような発言があった。

ところがチョウさんこと医局長（現在の県立広島病院 精神神経科部長の高畑紳一先生のご尊父）が俄然「反対する」の発言があり、一瞬小生の耳を疑った。反対の理由として「前回の日本精神神経学会を受けたため、医局員はほとんど一年間勉強できず、棒に振った」ということと、「医局の中でアルコール学会の会員が何人いますか」という理由だった。確かにOBの先生方はもっと学会員になっておられたと思うが、少数派であった。以前より高畑先生はすごく頭のいいというか、あまり人の考えてもいないことをスルッと云っては、聞く人をハッとさせることがしばしばであった。

もう一つ昔話を付け加えると、“医局不平5人男”とか“医局の七不思議”というのがあった。5人男についてはかつて宮地先生が

詳しく書いておられたと思うので、七不思議について解説しておこう。

医局員はある時期がくると、教授の御託宣で、芸者ではないが泣く泣く三味線を抱えて、医局から外に出て実務の修業をするのが習わしとなっていた。当時は銭金でなく、一日でも長く医局にいたことが医者としての箔と思ひ込んでいた時代である。嗚呼！

浅田成也先生、児玉久先生、高畑長吉先生等は外に出たことがない特別な人達だと医局内で密かに囁かれていた。今になって考えればそんなことは些末などうでもいいことではあったが…。

閑話休題

小沼教授が設立されたアルコール医学会は、その後、日本アルコール・薬物医学会、日本アルコール精神医学会、日本嗜癮行動学会と今回開催した日本アルコール関連問題学会と4つにわかれ、それぞれの道を踏んでおり、今回因縁の広島で行ったのは「第30回日本アルコール関連問題学会」で、平成20年6月20日・21日にANAクラウンプラザホテルにおいて開催した。

この第30回という節目の大会は、折りしもアルコール関連医療を長年支え、リードしてきた‘いわゆる’第2世代の立役者たちが第一線を退こうとしている転換の時機にも当たるので、アルコール関連問題を中心に広くアクション問題にまで視野を広げて、【基本テーマ】として、保健・医療・福祉・行政等対策推進の歴史的経過の中から、長年培ってきたアルコール関連医療の「Policy Practice理念、実践、Passionそして熱意」を再確認しながら、次の世代に引き継いでいくことを掲げた。

おかげさまで、全てのプログラムを滞りなく終えることができ、多少なりとも所期の目的を達成することができたのではないかと考

えている。会期中は梅雨の最中、2日間を通して1,010名の方々にご参加いただき、改めて感謝するところである。

また、小生の師匠であり、初代教授の小沼十寸穂先生が発起人の一人として「日本アルコール・薬物医学会」が立ち上がり、諸事情により退官記念の際に広島大会を開催できなかった経緯が前述のごとくで、今回、この領域を専門とする小生としては、本学会を当地で開催できたことに少なからず因縁を感じており多少なりとも恩返し?ができたのではないかと思います。

最後になりましたが、学会の運営に多大なご協力をいただいた多くの病院職員の方々へ深く感謝致しますと同時に、ご支援いただいた企業の皆様には心よりお礼申し上げます。

日本アルコール関連問題学会の今後ますますのご発展を祈念しながら報告する次第です。

追伸

1. 開会式では山脇成人教授に駆けつけ、祝辞を述べていただき、また、岡本泰昌先生には分科会の座長を務めて会を盛り上げ大変感謝しております。
2. この学会の事務局長としてKONUMA記念広島薬物依存研究所長の小沼杏坪先生が会の企画、立案、設営のほとんどを取り仕切り、成功裏に終わらせたのは一に先生の大奮闘によるものであることを当然ながら附記しておく。
3. 300人近く出席していただいた懇親会では、オープニングセレモニーとして小沼教授ゆかりの秋田県の銘酒“刈穂”で鏡開きをし、会を弥が上にも盛り上げたことを追記しておきます。

(つくえ いちろう：瀬野川病院、第30回日本アルコール関連問題学会大会長)